

# 奈良時代の盤上遊戯に関する新知見

独立行政法人国立文化財機構  
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

**要旨** 平城京二条大路 SD5100 出土土師器杯の内面には、円形の列点記号が刻されている。同様の記号は、秋田城跡をはじめ、全国の官衙関連遺跡を中心に分布している。また、この記号は、ユンノリという現代韓国の盤上遊戯の盤面に通底し、より古いタイプの記号と見ることができる。従来、万葉集の用字の検討から、奈良時代にユンノリに似た遊戯が存在することが推定されていたが、本資料はその盤面の可能性が考えられる。正倉院に残る囲碁や双六とは異なる、古代の遊戯・娯楽の一端を明らかにする新たな知見といえる。

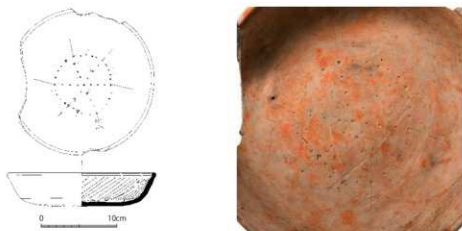


図1 平城京 SD5100 出土土師器杯

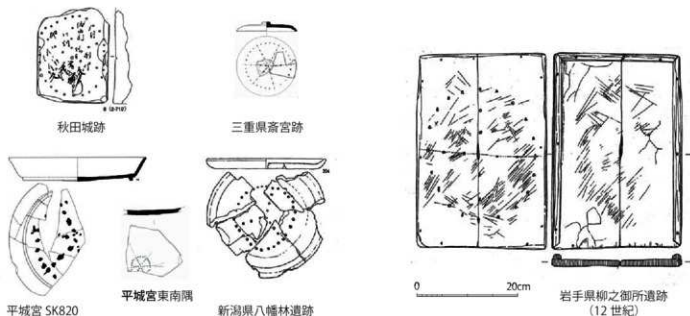
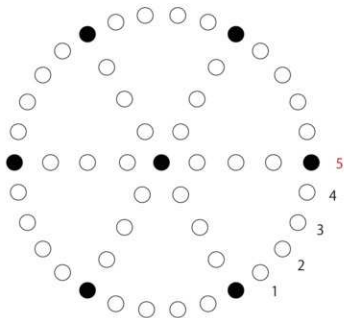
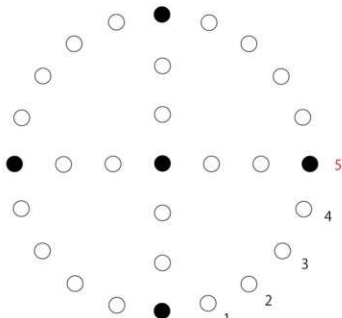


図2 列点記号の類例



6分割タイプ  
(平城京SD5100)



4分割タイプ  
(柳之御所)

図3 出土品にみる列点記号の2類型

史料1 『万葉集』の用字とユンノリ

すえのなか **ころ** **よど**  
 梓弓未中**一伏三起**淀めりし君には逢ひめ嘆きは止まぬ  
 (巻12・2988)

ねも **ころ** **ころ**に  
 菅の根の根毛**一伏三向**凝呂尔・・・  
 (巻13・3284)

ゆふ **つく** **よ**  
 春霞たなびく京の暮**三伏一向**夜清く照ららむ高松の野に  
 (巻10・1874)

ちび **なな** **かみのまにまに**  
 わが恋は千引きの石を七ばかり首に掛けむも神**之諸伏**  
 (巻4・743)

おしか **ど** **よ** **かり** がねきこゆ **く**  
 さ雄鹿の妻問ふ時に月を良**み切木四**之泣所聞今し来らしも  
 (巻10・2131)

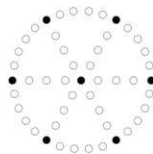
やそとも **お** **かり** がねのきつくこのころ  
 ・・・・ものふの八十伴の男は**折木四**哭之来継比日・・・  
 (巻6・948)

▲ ▲ ▲	▽ ▽ ▽	◐ ◐ ◐	◑ ◑ ◑	◒ ◒ ◒	採の目
すべて伏	すべて向	一伏三向	二伏二向	三伏一向	組み合わせ
5	4	3	2	1	マス
牟・馬(モ)	流・牛(リュツ・ユツ)	杰・鶏・鳥(コル)	開・犬(ケ・ク・カエ)	徒・豚(ト)	韓国の呼び方
諸伏(まにまに)?		一伏三向(ころ)		三伏一向(つく)	『万葉集』の表記と訓み

ユンノリの採の目

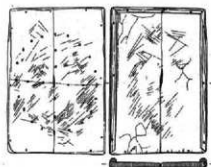
ユンノリの4本の棒とその組み合わせに関連すると考えられる。

韓半島



現代韓国のユンノリ

日本



現代

奈良～平安（平城京）

12世紀（柳之御所）

図4 盤上遊戯の変遷（仮説）

## 史料2 遊戯の名前と博戯

『倭名抄』・・・雑芸部。

「樗蒲＝加利宇知（かりうち）」 →かり＝切木四・折木四？

『倭名抄』の樗蒲＝加利宇知（かりうち）ならば、

捕亡令13義解に「<sup>はくぎ</sup>博戯者、双六<sup>ちよほ</sup>樗蒲の属」とある。

『隋書』倭国伝：倭人・・・囲碁・すごろく・樗蒲などの遊びを好む。

天武天皇14年（685）9月：天皇御大安殿、喚王卿等殿前、以令博戯。

持統天皇3年（689）12月：双六を禁め断む。

文武天皇2年（698）7月：博戯・徒手の徒を禁む。

延暦3年（784）10月：遊食・博戯の徒は、蔭贖を論はず決杖一百。

博打（はくうち、はくち）・遊戯の実態を考古学的に解明できる可能性をもつ。

## 今回の研究の意義

- a, 謎の記号を刻した土師器の使用法が判明** 円形列点記号をもつ当該資料が、『万葉集』の用字や韓国の民俗遊戯の検討から奈良時代に存在が推定されていた、現代韓国の双六遊び「ユンノリ」によく似た遊戯の盤面であることが明らかになった。
- b, 古代の遊戯「栲蒲」の実態を解明** この遊びの名称は、『和名抄』にみえる「栲蒲（ちよぼ）」（和名かりうち）にあたる可能性が高まった。
- c, 古代遊戯具の新たな事例** 古代の遊戯については、従来、囲碁（碁石）・双六（サイコロ）のほか木トンボ、コマなどの実例が出土遺物から知られていたが、今回の研究成果により、「かりうち（栲蒲）」という新しい事例が加わった。
- d, 日韓文化交流史の新たな一コマ** 出土遺物と『万葉集』の研究成果、韓国の民俗遊戯例の総合的な考察に基づき、遊戯の実態が明らかになったことによって、古代の日韓ひいては東アジアの文化交流の実態を示す重要な知見が得られることになった。また、現代日本では忘れ去られた古代の遊戯を、現代韓国の遊戯例を参考に復元することができたことから、今後も日韓相互の文化を深く理解することにより、古代社会の新たな歴史像を復元する手がかりが得られるものと期待される。

発表：小田裕樹（都城発掘調査部）